



転生ババアは
見過ごせない! 3
～元悪徳女帝の二日目ライフ～

ナカノムラアヤスケ

Ayasuke Nakamura

RB

レジーナ文庫

登場人物紹介

ビジネ

献聖教会の財務部門を
束ねる枢機卿。
切れ者の商人でもあり
黒い噂が絶えない。

フォクネ

献聖教会の奉仕部門を
束ねる枢機卿。
賢く献身的な美女で
多くの信徒に支持されている。

ラクリマ

献聖教会の騎士団を
束ねる枢機卿。
穏やかだが底知れぬ
実力の持ち主。

デュラン

献聖教会の女性騎士。
まだ若いが部隊長を
務める凄腕の剣士。

ラウラリス

「悪徳女帝」と伝えられる
エルダヌス帝国の最後の皇帝。
三百年後の帝国に転生し、
様々な事件に巻き込まれつつも
第二の人生を満喫中。

目次

転生ババアは見過ごせない！3
〜元悪徳女帝の二周目ライフ〜

書き下ろし番外編

婚約破棄お嬢様は我慢しない！

転生ババアは見過ごせない！3

〜元悪徳女帝の二周目ライフ〜

第一話 跳躍ババア

旅は道連れ、世は情け——と初めて口にしたのはいったい誰であろうか。世の中を渡っていくには互いに支え合う人情が大切であり、旅では連れがいるほうが心強い。

「まさかこんなところであんた、顔を合わせるとは思ってもみなかつたよ」

陽気に笑うこの少女。名前をラウラリス・エルダヌス。

可憐な容姿に秘めた魂は、三百年前に世界征服を目論んだ悪の皇帝。けれどもその真意は自らに数多の憎悪を集めることによって世界の団結を促し、勇者に討たれることで世界平和を実現することであった。

本来であればそこで人生の幕を引くところ、神に功績を認められたことで新たな肉体を得て、今の世に転生を果たしたのである。

今は女帝という宿命から解放され、自由気ままに第二の人生を謳歌中だ

「それはこちらの台詞ですよ。世間というのは、案外と狭いものかもしれませんね」

陽気に笑うラウラリスの隣にいるのは、馬車の御者席に座る行商人。彼は、ラウラ

リスが新たな人生を始めて間もない頃に知り合った、あの商人であった。次なる町を目指して岩場の街道を進んでいたラウラリスだったが、その途中で馬車に乗っていたこの商人に声をかけられたのだ。

意外すぎる再会に些か驚くラウラリスに、商人は自分の馬車に乗っていかないかと提案したのだ。

寝食以外はほぼ一日中歩き通しでも全く問題ないラウラリスであったが、楽ができるならそれに越したことはない。提案を素直に受け入れ、彼の隣に腰を下ろした次第である。

「あれからどうだい、景気のほうは」

「ぼちぼち、と言ったところですかね。特別に何か売れたわけでもなく、かといって特別に売れなかったわけでもありません」

「にしちゃあ、結構な荷物を積んでるね」

ラウラリスが背後の荷台を振り向くと、堆く積み上がった木箱の山だ。その全てが行商人の扱う商売品なのである。それに、馬車の周囲には幾人もの武装した男達——

ハンターが警護をしている。ラウラリスの見立てでは、それなりに腕の立つ人員が揃っている。

以前、不幸にもラウラリスにちょっとしたかきを出して捕まったガマスという盗賊がいた。あの程度なら問題なく撃退できるくらいの実力はあるだろう。これだけのハンターを雇うとなれば、かなりの金額が求められる。それを「ぼちぼち」の稼ぎで賄いきれるのだろうか。

「もしかして、アンタって結構やり手の商人だったりするのかい？」

「少なくとも、明日の飯に困るような稼ぎはしていない、とだけ言っておきましょうか」

ラウラリスの問いかけに、商人は調子を変えずにとぼけた風に返す。人当たりは良さそうだが、単なるお人好しではなさそうな雰囲気だ。もともと、商人というのは、おおよそが腹に「物を抱えている者ばかり。この行商人はその中でも比較的、善人の部類に入るほうであろう。」

「おい嬢ちゃん」

行商人と話を咲かせていると、付近を歩くハンターの一人がラウラリスに声をかけてきた。

「随分とでっかいお守りを持ってんな、アンタ」

「お守りって、これのことかい」

ラウラリスは荷台の縁からはみ出ている鞘入りの長剣を叩いた。

「他に何かあるってんだよ。旅人が護身用に剣を持つてのはよくある話だが、嬢ちゃんのそりゃちよいとデカすぎだろ」

「立派なお守りだろ？」

ラウラリスは悪戯っ子のような笑みを浮かべる。ハンターは何かを言いたげな風であったが、肩を竦めて首を横に振った。常識的に考えて、人間の背丈に匹敵する金属製の長剣を年若い娘が背負えるはずがない。ラウラリスの長剣が、外見はそれなりに整えてはいるが、中身は木製かもっと軽い素材で作られた「ハッター」であると判断したのだろうか。

「……………ん？」

そんなやり取りをしていると、ふとラウラリスが周囲を見渡した。

「どうかしましたか？」

唐突に辺りを見渡すラウラリスに、行商人が聞く。

それに対して、ラウラリスは困ったようにポリポリと頭を掻いた。

「やれやれ、なんでこういつもスナリといかないのかねえ。もしかして、何かに取り憑かれてるんじゃないだろうね」

「それはいつたいたいどういこと——」
商人が追及しようとしたところで、周りにいたハンター達の表情が急に険しさを帯びた。

「馬車を停めろ！」

ハンターの一人が発した鋭い声に、商人は数秒の間を要してから、慌てて手綱を引き馬車を停めた。

ハンター達は各々が武器を手に取ると、馬車を守るように構える。

商人は落ち着きなさげにキョロキョロと視線を彷徨わせる一方で、隣のラウラリスは平然と座っていた。やがて——岩場の陰から、次の瞬間には巨大な蜥蜴が多数飛び出してきた。

——跳躍蜥蜴。

発達した後ろ足が特徴の、大きな蜥蜴の形をした危険種。その脚力は一足で地上から二メートル以上も高らかに舞うほど。それらが一斉に、馬車とそれを囲うハンター達に襲いかかった。

「ど、どうやら運悪く危険種の群れと遭遇してしまったみたいですね」

その運の悪さはもしかしたら自分が原因かもしれない、とラウラリスは申し訳ない気持ちになる。

取り憑いているとなればおそらくは、自分に新たな人生を与えてくれた存在だろう。

普通に考えれば幸運を呼び寄せそうなものだが。

（ああでも、あの神様の御加護なら、面倒事まで一気に引き寄せそうだ）

人をおちよくることに人生を……いや神生を懸けていそうなあの困った神様なら、行く先々で何かしらに巻き込まれる己の悪運にも納得だ。

「いやあ、跳躍蜥蜴程度ならここにいる面子でも十分に対処できるだろうさ」

跳躍蜥蜴の強さはさほどではない。前足は殆ど発達しておらず、鋭い牙も持っていない。攻撃はほぼ全てが、強靱な後ろ足による蹴り。その脚力から繰り出される蹴りは、人間の骨をへし折るには十分すぎるものであり、当たり所が悪ければ致命傷となる。

だが、仕掛ける際は必ず強く踏み込む予備動作があり、それさえ見誤らなければ直線的な跳び蹴りがくるだけだ。避けるのは容易い。唯一、群れに遭遇した場合には、死角から攻撃を仕掛けられる恐れがあるが、ハンター達もそれは重々承知していた。

襲いくる跳躍蜥蜴を馬車から引き離すように立ち位置を変え、かつ常に己の死角を意

識し不意打ちを避けている。

中にはあえて腕の良い奴らを揃えたね。

「なかなか腕の良い奴らを揃えたね」

「こ、この近辺には危険種の出没が多く確認されてしまったから。それを前提にハンターを雇ったのですよ。単なる杞憂で終わるのが一番よかったです」

ハンター達の堅実な戦いぶりに落ち着いてきたのか、商人は胸に手を当てながら言った。

「取り越し苦労が一番って発想は好きだよ。そしてその備えに躊躇なく金を出すところもね」

「私に商売のイロハを叩き込んでくださった方から、口を酸っぱくするほど仕込まれましたから。……それにしても随分と平然としますね」

「修羅場は慣れてるからね」

そういえば、と戦っている一人のハンターが思い出す。危険種が襲ってくる直前に見せたラウリスの反応。

もしかしたら彼女はハンター達よりも明らかに早く危険種の接近に気が付いていたのでは……？　しかし、その疑問を口にするよりも早く事態が急変した。

「ぐああっ……!!」

ハンターの悲鳴が響いてきた。そちらを見やると、跳躍蜥蜴と同じ形をしながら他の個体より一回り以上も巨大な危険種が立っていた。

その正面の少し離れた位置には倒れたハンターがおり、手に持っていた剣は半ばから歪んでいた。

体格が良く力に優れた個体が群れを率いる存在になるのは、野生動物に限った話ではない。

あの大きな跳躍蜥蜴が、馬車を襲っている危険種達を率いている長だった。

「マズい！　手の空いてる奴はフォローしろ！」

誰かが声を張り上げるが、それに応答が出る前に跳躍蜥蜴の長が甲高い奇声を発し、他の個体の跳躍を大きく超えた跳躍を見せる。その降下先にいるのは、未だ倒れたままのハンター。急いで立ち上がろうと藻掻くが、直前に受けた蹴りの衝撃が躰に残っており、足に力が入らないのだ。

——やられる！

誰もがそう思ったとき、一陣の風が地を駆け抜ける。

——ガギンツツ!!

次の瞬間に響いたのは、ハンターの躰が潰れる音ではなく、硬質な物体の反響音であった。

「さすがに目の前で死なれちゃ寝覚めが悪いからね。手を出させてもらったよ」

そう言ったのは他でもない、ラウラリスであった。長剣を背負うように構え、跳躍蜥蜴の長が繰り出した上空からの跳び蹴りを見事に受け止めていたのだ。自分よりも一回りも若く小柄な少女が成した現実を受け止めきれないのか、倒れたままのハンターは目を瞬かせるだけで動かない。

それは、御者席に座っていた商人も同じだった。彼はラウラリスと己の隣を何度も交互に見る。

彼女はたしかに近くに座っていたはずなのに、気が付けばあの場所にいた。

忽然と姿を消し、そして現れたようにしか思えなかった。

「——って、いい加減に退きなっ！」

怒声を発しながら、ラウラリスは片足で地面を踏みつけた。

その衝撃は躰を通して剣へと伝わり、跳躍蜥蜴の大きな躰を吹き飛ばした。

「アンタもだよ！ そこにいられると邪魔だつての！」

倒れているハンターに突き付けるような台詞を浴びせる。

我に返ったハンターはビクリと肩を震わせると、大慌てで立ち上がりその場から離脱した。

「まったく。手間がかかる」

ふんつ、と鼻を鳴らしてから、ラウラリスは背後の跳躍蜥蜴へと振り向いた。

長はラウラリスを強大な敵と認識したようで、血走った目でラウラリスを見据えていた。

「いいよ、かかってきな。相手になってやるよ」

ラウラリスは挑発を述べながら長剣を構えた。

言葉は通じずとも、己が侮られていると感じたのか。跳躍蜥蜴の長は大きく叫び声を上げると高らかに跳躍した。ハンターを潰そうとしたときよりも更に数段高い位置にまで舞い上がる。

しかし——

「はい、いらっしやい」

—— ツツ!?

跳躍蜥蜴の長は驚愕した。

何故ならば、高々と舞った自身と同じ目線に、ラウラリスの目があったからだ。



彼女は跳躍蜥蜴の長と同時に踏み切り、それと同じ高さまで跳んだのだ。

「存分に恨みな」

ラウラリスは眩き、剣が翻った。

少しの間を置いてラウラリスが地面に着地すれば、背後で落下する二つの物体。跳躍蜥蜴の胴体と、それから首を断たれた頭部であった。長の死が引き金となり、生き残っていた跳躍蜥蜴は残らずその場から逃げ出す。危険種の去っていく姿を見送ってから、ラウラリスは長剣を鞘に収めた。それから調子を確かめるように己の手を開閉させる。

「調子は完全に戻ったかね」

『亡国を憂える者』との一件。最後の最後に無理をした反動は、ラウラリスの躰にかなりの負荷を与えていた。そのダメージが抜け切ったのを、今の動きで実感した。(ま、それでも全盛期にはほど遠いけど)と内心付け足しながら。

「あ、アンタ……」

ハンターの一人が震える指でこちらを指さしていた。ラウラリスの長剣を、お守りと揶揄したあのハンターだ。

「まさかアンタ、あの『劍姫ラウラリス』かつ?」

「……いや誰よそれ？」

なんだか知らないところで妙な広まり方をしているラウラリスであった。

考えてみれば当然の帰結だ。町を訪れると、その都度近辺で悪事を働く手配犯を片っ端から捕まえ、時には腕利きのハンターでさえ苦戦する危険種をたつた一人で討伐する。更には、どこから漏れたかは不明だが、捕縛推奨が銀級である『亡国を憂える者』の幹部が率いる一派を壊滅に追いやったという話も囁かれ始めている。

当人にその気はなくとも、嫌というほど目を引く行動力である。可憐で美しい姿とは裏腹の凄腕の剣士であることから、『剣の姫様』的な意味が混ざり合って『剣姫』という二つ名が本人の与り知らぬところで定着していたのだ。

「私は姫って柄じゃあないんだがね！」

商人に雇われていたハンターに一連の話聞いたラウラリスは、盛大にツッコミを返した。外見はともかく、内面は八十を超えたババアなのだ。しかも元皇帝。とてもではないが「姫」などという呼び名が似合うとは思えなかった。

ちよつとした遭遇戦があったことを除けば馬車は順調に道程を消化し、無事に目的地の町へと辿り着いた。

「では、こちらが依頼達成の証明書です」

「良いのか？ 恥ずかしい話だが、俺達は劍姫のお嬢さんがいなければヤバかったぜ？」

「だとしても、あなた達はあなた達のできる限りで仕事をしてくれた。それに、見通しが甘かったのは私も同じですから」

ここまでの道のりで遭遇するであろう危険種の強さを前もって想定し、それに適した強さのハンターを雇ったつもりであった。しかし実際に現れた危険種は行商人の想定を超えており、結果的にはハンター達をも危険に晒すこととなってしまった。これもはや行商人の失態なのだ。ハンターへの報酬はその謝罪も含めていた。

「……本音を言えば助かる。今回の依頼で仲間の装備が壊れちゃってな」

ハンターは行商人から一枚の紙を受け取った。ギルドが発行している書類だ。これに依頼主がサインをし、ギルドに提出することによって依頼の完了が証明され、報酬が支払われる仕組みになっている。特殊な製法とインクで作成された書類で、偽造をすれば罰則として一発でギルドから追放される。書類の内容を改めて確認し、大事に懐に収めて、ハンターはラウラリスのほうを向く。

「あなたにも世話になった。この恩は忘れねえ」

「そうかい。ま、死なない程度に頑張りな」

ハンター達は彼女に頭を下げてから、馬車から離れていった。

「じゃ、私もこれで失礼するよ。ここまで乗せてくれてありがとう」

「いやいや！　ちよ、ちよっと待ってくださいー！」

ラウラリスが長剣を背負って去ろうとすると、行商人は大慌てで制止した。

「ハンター達に言った言葉に嘘はありませんが、今回無事にこの町に辿り着けたのは間違いなくあなたのおかげです！　そのお礼をまださせてもらってませんよ!？」

「なんだ、そんなことかい。あの程度、馬車の乗車代金だよ」

これは何も善意から出ただけの台詞ではない。ラウラリスの中では、危険種の撃退と馬車に乗せてもらったことはほぼ等価であった。むしろ、以前に乗せてもらった件も含めて代金を払うつもりすらあったのだ。

「だとしてももらいすぎですよ！　……このまま黙ってあなたを行かせてしまつては、私の商人としての沽券こけんに関わりません。何かお礼をさせてください」

「……そこまで言うなら」

今時珍しくくらいに律儀りぎな商人だね、とラウラリスは内心で感心した。彼女の中での「今時」は三百年ほど昔のことかもしれないが、それはいいとして。

「けどあいにく、金にはあまり困こつちやいなんだよねえ。これ以上あつても嵩張かさばつて

邪魔になつちまうし」

金というのは、ある一定以上の量になると純粋な重荷になる。そのためラウラリスは、行く先々で余分に貯まった金は、なるべくその町で使い切るようにしていた。ちなみに、主な金の消費先は特産グルメの食べ歩きである。そんな事情を知らずとも、行商人はしばし考えると妙案みょうあんを思いついたのか首を縦に振った。

「この町にはどのくらい滞在の予定で？」

「さあね。一週間はいるだろうけど……一ヶ月とまではいかないだろうさ」

これまでいくつかの町を訪れてきた経験から、ラウラリスはざっくりと計算した。

——この町に蔓延はびこる手配犯達ていぱんが全て捕縛ほくわくされるまで、残り一ヶ月未満である。

「なるほどなるほど。ちなみに、宿泊先のアテは？」

「まだ決めちゃいないが……それがどうしたよ？」

「でしたら、私が懇意こんいにしている宿屋などはどうでしょうか？　事前の予約が必要な宿なのですが、今回のお礼と言うことで私がそちらを手配しましょう。もちろん、滞在中の宿泊費用はこちら持ちということぞ」

「そりゃ助かるが……そこまでしてもらって良いのかい？」

なんだか、今度は逆にラウラリスがもらいすぎていような気がしてきたが、行商

人は否定した。

「いえ、私の中では正当な対価です。得た商品には正当な支払いを。受けた恩には相應の礼を。……どうか私を助けるとでも思つて、この提案を受けて頂けませんか？」

「そんなじゃあ……お言葉に甘えるでしょうかね」

ラウラリスはもらえるものはしっかりと頂戴する派である。加えて、商人の沽券こけんに関わるというのならば、受け取らなければ彼に失礼であろう。そこでふと、ラウラリスは気が付いた。

「そういうやあ、今の今までアンタの名前を聞いてなかったね。あ、私の名前は——」

「ラウラリスさんですね。いえ、知つたのはハンターの方々の話を聞いた、つい先ほどなのですが。まさかあのとき知り合つた方が噂の美少女剣士とは」

ぺこりと頭を下げてから、行商人ぎやうしやうじんは改めて名乗つた。

「申し遅れましたが、私はアーキナ・イシヨウ。しがな商人です。以後、お見知りおきとご虫屑むしくずをお願いいたします」



ラウラリスが足を踏み入れた町は賑にぎわっているようで、人通りは多かった。

ちらほらと出店もあり、香かぐしい匂においが空気に溶け込んでいた。

「活気があるつてのは良いことだねえ。その場にいるだけで楽しい気持ちになる」

「なんだかテロリストの一集団が壊滅したという噂です。おかげでこの辺りの治安が良くなったとかなんとかで、商人達も結構集まっているらしいですよ」

「そりゃ結構なこと。……手間をかけた甲斐かひがあったもんだ」

後半はアーキナに聞こえないようにぼつりと付け足した。

話を変えるようにラウラリスは口を開いた。

「ところで、紹介してくれる宿屋つてのは飯は美味うまいのかね？」

「もちろんですよ。それを目当てで泊まりに来る貴族がいるほどですから」

「良いね。ご当地グルメを楽しむのが私の旅の大きな楽しみだからね」

「きつと、ご期待に沿えると思いますよ」

話を弾はずませながら道行く二人。

——さて、既にお察しの者も多くいるだろうが、ラウラリスが行く先には常に騒動がある。本人の望む望まざるにかかわらず、もはやこれは彼女がそういった星の下に生まれたとしか言いようがなかった。決して、どこぞの愉快犯な神様が意図したものでは

ない。

そして今回もその星の巡り合わせが訪れた。歩いていた二人の前で、ふと人の流れが止まっていた。首を傾げるアーキナ。

「……見世物でもやっているのでしょうか？」

「それにしちやあ……あんまし明るい雰囲気じゃあなさそうだ」

ラウラリスは困ったように頭を掻く。

経験則から言つて、面倒事が起きている予感があった。

「うん、ちよいと見てくるよ」

「え？——つて、ラウラリスさんっ!？」

背中にアーキナの慌てた声を受けながら、ラウラリスは流れが止まった人混みの中へと突入した。

背丈ほどの長剣を背負っているとは思えない体捌きで、誰にぶつかってもなくスルスルと人混みの間を進んでいく。そうして人垣を抜けた先には、半ば予想通りの光景が広がっていた。

人集りの中心にぼつかりと開いた空白地帯。

その中心で二人の若者が睨み合っていた。

両者共に顔から血を流し、痣をいくつも拵えている。

誰がどう見ても、若さ故の衝動に身を任せた喧嘩であった。

「むう……どちらもズブの素人だね」

拳の握り方から足の位置まで何から何までなっていない。おそらく、歩いていて肩がぶつかったとか足が引っかけたとか、きっかけとしてはその程度であろう。

「若いからやんちゃしたいのはわかるけど、何もこんな道のど真ん中でやらかすことないだろうに。やるなら路地裏に行け、路地裏に」

ラウラリスは腕を組んで、呆れたようにため息を吐いた。あまりにも忌憚のない物言いに、付近にいた者達がぎよっとした目をラウラリスに向ける。それは当事者達の耳にも届いていたらしく、二人の若者が揃ってラウラリスのほうを向いた。怒りさえ含んでいそうな若者二人の視線を集めるも、当のラウラリスは鼻を鳴らすだけだ。むしろ、かかってくるなら存分に相手をしてやると言わんばかりの態度だ。

なお、ラウラリスが喧嘩の仲裁に入る場合、基本的には「とりあえず両方（拳で）黙らせてから話を聞く」というスタンス。今まさにそれが実行されようとしていた。

ところが、ラウラリスが拳を握るよりも早くこの場に割って入る姿があった。

「そこまです！」

喧騒溢れる町中でも凜と通る声に、ラウラリスの立っている位置とは逆側の人垣が左右に割れる。

道のように開かれた人々の間から現れたのは、見事な甲冑を着た集団だった。先頭を歩くのは、兜を脇に抱えた女性だ。歳はおそらく二十の半ば辺りだろうか。

「ここは往來ですよ！ 今すぐ争いをやめなさい！」

女性がぴしやりと言いつつ、若者二人はばつの悪そうな顔になる。

苛立ちは収まらなくとも、これ以上騒ぎを起こす気はなくなったのか、人垣を押し退けながらこの場を去っていった。衝動をぶつけ合っていた若者二人の代わりに、甲冑を着た集団が人垣の中心に立つ。すると雰囲気は打って変わり、色めき立つような空気が広がっていた。

「……なんなのさ、あれ」

「あれは献聖教会の騎士団でしょうね」

いつの間にか人垣の間を抜けてきたアーキナが、甲冑の集団を見て言った。

「ケンセイキョウカイ？」

「おや、ご存じないですか。王都のほうでは割とメジャーなんですけど……辺境ではあまり有名ではないのかもしれないですね」

献聖教会——それは献身奉仕の心こそが世を照らす光であると信じる教えである。

「この町にも献聖教会の建物があるはずですよ。私は信徒ではありませんが、品物を卸したことは何度かありますね」

「献身奉仕ってお題目なのに、なんで騎士団なんだ？ 武装して奉仕ってどうなんだい？」

「曰く『力なき献身に意味はなく、献身なき力にもまた意味はない』という理念だそうです」

「なんじゃそりゃ」

わかるようなわからないような、と首を捻るラウラリス。だがその瞬間、唐突に彼女の視線が鋭くなった。

「アーキナ、ちょっとこれ預かってくれ」

ラウラリスはアーキナの返事を待たず、長剣の留め金を外して彼に放り投げた。反射的に受け取ったアーキナだったが、その重量に倒れ込みそうになる。背後からの悲鳴を耳にしつつ、ラウラリスは人垣の開いた空間を一直線に突っ切る。当然、中心部にいた甲冑の集団とすれ違う。その強烈な加速を目で捉えられた者は殆どいない。すれ違った甲冑達でさえ、大半が「突風が吹いた」程度の認識しかできなかった。

——ただ唯一、顔をあらわにしている女性は別であった。

女性はハツとなり、己の側を横切った姿を追って背後を振り返る。しかし、既にラウリスの姿は人混みの中に埋もれており……少しして人の絶叫が辺りに響き渡った。

またも人垣が割れると、そこには地に伏した男とその腕を捻り上げているラウリスの姿があった。捻られている側の手には、貨幣が詰まっていると思われる袋が握られている。

「私の目の前でスリをしようなんざ、三百と八十年早いんだよ!!」

微妙に具体的な年数である。それはともかく、ラウリスはあの人混みの中、先ほどの騒ぎに乗じて悪さを働こうとしていた者を目敏く見つけていたのだ。恐るべき高性能悪人センサーである。

ラウリスは周囲に声をかけ、盗まれた者を見つけると取り返した財布を渡してやった。

それから、腕を捻ったまま盗人を無理矢理立ち上がらせると「さて、どうしたものか」と呟く。

と、甲冑の集団を目にしてこれ幸いと笑みを浮かべ、彼らのほうへと近付いていった。

「悪いけど、これを引き取っちゃくれないかね。私はこの後に予定があるんだよ」

「……………」

可憐な少女からの、お願い。だが、実質的には後始末の押しつけだ。献聖教会の騎士達もお願いを無下にもできず、かといって素直に引き受けるのもまた躊躇われた。その最中にも、盗人は腕を捻られた痛みに顔を蹙めながらもどうにか抜け出そうと藻掻く。

面倒になったラウリスは騎士達に聞こえないよう、盗人に囁きかけた。

「——二度と腕が使い物にならなくなってもいいの？」

鈴の音色のように美しい声をして、死神の宣告にも等しい語りかけであった。途端に盗人の顔から血の気が引き、即座に抵抗をやめた。代わりにガタガタと震え始め、盗人の体中から滝のような冷や汗が流れ出す。頭が理解するよりも先に、膝が屈服したのだ。震え上がる盗人を見て、ラウリスは満足気に頷いた。

「うん、素直でよろしい。じゃ頼んだよ」

「…………ええ、その犯罪者はこちらで引き受けましょう」

半ば勢いに押される形ではあったが、盗人の身柄を受け取る女性。ラウリスが腕を押すと、盗人は顔に恐怖を浮かべたまま、一刻も早く彼女から離れるため進んで甲冑達に拘束された。それらの様子を一瞥してから、女性騎士は改めてラウリスのほうへ

と顔を向けた。

「見事なお手前でした。目で追うのがやっとなというのは、いつぶりがわかりません」

「そりやどうも」

「貴様っ、デュラン様に失礼な態度をっ」

褒め言葉にラウラリスが素っ気なく対応した途端、女性の背後にいた騎士達がいきり立った。どうやら、この女性は他の騎士達を率いるかそれに類する地位にいるようだ。だが女性自身がさっと手を上げて制すると、騎士達は素直に引き下がった。

「部下が申し訳ありません。気を悪くされましたら、彼らに代わって私が謝罪します」

「別に気にするほど細い神経してないから」

むしろ、悪鬼羅刹と称されても鼻歌交じりで聞き流せるくらいに極太い神経の持ち主である。

「じゃ、私はこれで」

「せめてお名前を——」

「ラウラリス。根無し草の賞金稼ぎさ」

女性呼び止めるもラウラリスは軽く名乗って後ろ手を振り、人混みの中に消えていった。

「ちよ、ちよっとラウラリスさんっ!？」

その後を、長剣を両手でどうにか抱えたアーキナがよろつきながらも慌てて追いかける。

二人が消えた方角をしばらく眺めたまま、この女性騎士——デュランは佇む。ラウラリスは背を向けていたので気が付いていなかったが、彼女が名乗ったときにデュランは僅かながら驚きの表情を浮かべていた。

「……デュラン様、いかがなさいましたか？」

部下の一人が尋ねると、デュランは首を横に振った。

「いえ、今は良いでしょう。それよりも、盗人をハンターギルドに引き渡しませう」

「畏まりました」

盗人の様子は相変わらず。騎士に拘束されたまま、凍えるように身を小刻みに震わせていた。

その様を見て、騎士達は抵抗しないことに楽を覚えるよりも、不気味さを感じるほどであった。

「なるほど、噂には聞いていましたが、どうやら単なる眉唾というわけでもなさそうで

すね」

部下達に聞こえぬように、デュランは口元をほころばせて呟いた。



朝。閉じられたカーテンの隙間から差し込む陽光。

仄かな光を瞼に感じ、ラウラリスは天蓋付きのベッドから身を起こした。

「あー、よく寝た」

欠伸で開いた口を手で塞ぎながら、グッと伸びをする。

単なる日常的な寝起きの様子であるはずなのに、清純と妖艶の相反する二つが両立する奇跡の調和を演出していた。もしこの場に芸術家がいれば、この光景を目に焼き付け、生涯の情熱を注いで作品を生み出すことであろう。

ラウラリスはここ一週間ほど、アーキナが手配した宿で生活していた。案内されたのは、ラウラリスの想定よりも一ランクか二ランクほど上の宿であり、彼女も驚きを隠せなかった。

ロビーの受付に赴いた際、従業員とアーキナは何やら顔見知りの対応であった。

過去に何度もこの宿を利用しているのだろう。いわゆるお得意様というやつだ。

——こんな高級宿のお得意様になるほどの商人。

いい加減にアーキナの正体が気になるところであったが、問いかけたところで「単なる一介の商人ですよ」と笑って答えるだけだ。

ラウラリスにとって、彼は転生してから出会った人間の中で最も謎の多い人物かもしれない。

謎は謎として、彼が厚意で宿を手配してくれたのには違いなかった。

ラウラリスは素直にその厚意に甘え、この一週間で優雅に生活しているのである。

「さ、今日も元気に悪党をとっちめるかい」

従業員が部屋に運んできた朝食に舌鼓を打ち、装備を調べてからラウラリスは気力十分で町に繰り出した。

アーキナはアーキナで仕事があるということ、宿を紹介された後に別れて以降、顔を合わせてはいない。宿泊代金は既にまとめて払っているようで、その辺りに関しては問題なかった。

ラウラリスとしては居心地が良いので、アーキナが払った代金分の期間が過ぎたら、自腹でもうしばらく過ごしても良いかもと考えていた。既にそのくらいの蓄えはあり、

むしろ金の使い道としては健全であろう。昼間はギルドが募集を出す手配犯を捕まえ、夜は宿で出てくる高級料理を楽しみ、そして寢床に入り次の朝を迎える。それがこしばらくのラウラリスのルーティーンであった。

第二話 困った性分のババア

あるときは、町でマフィアまが紛いの集団を束ねている荒くれを。またあるときは、非合法な取引に手を出している元締めもとじを。またまたあるときは、町から少し離れた位置に潜んでいた盗賊の一団を。

ラウラリスは悪人を見つけ出す抜群きゅうぐんの嗅覚きゅうかくをもつて、片っ端かたはしから手配犯を捕縛ほぼくしていった。中にはラウラリスの姿を目にしただけで呆気なく降参し、お縄につく者もいた。劍姫の名前は、ハンターのみならず悪党達の間にも広がっているようで、顔はわからなくとも、可憐な容姿に不釣り合いすぎる長剣の組み合わせで、目の前にいる人物がどういった存在なのか気が付いてしまうのだ。

ある意味手間てまが省はぶけていと言えなくもなかったが、有名になるということは相應の弊害も出てくる。

劍姫の名は町に蔓延はびこる悪党の耳にも届いており、それに対する反応は様々だ。ラウラリスの苛烈しつれつな手腕しゅわんを単なる噂話と断じて暢気のんきに構えていた者。

あるいは強い警戒心を抱き、迎え撃とうと構えていた者。

残念ながら、どちらも前述の通りラウリスの手によって、今頃はハンターギルドの牢屋で冷たい飯を食べていた。

当然、それらとは違った行動に出た者もいる。——ここにも一人、行動を起こしている者がいた。誰もが寝静まった深夜。家屋の明かりは殆どが消えており、町を照らすのは空に煌めく星々のみ。そんな夜の町の更に裏側。星明かりすら遮られる路地裏を走る一人の男がいた。

明かりのない道を足音を立てず進むその動きから、彼が「素人」でないのは明らかであった。

察しの通り、ギルドで手配されていた犯罪者の一人である。

罪状は詐欺行為。経験の浅い新人ハンターに対し、粗悪な装備や薬を高性能な品と詐称して売りつけ、利益を上げているのだ。

備品の仕入れもハンターの大事な技術の一つ。未熟なうちに手痛い失敗をするのは、ある意味で通過儀礼。

しかし、この詐欺犯による被害はこの町に限らず他の場所でも多発しており、命を落としたハンターもいる。その悪質な犯行から、この詐欺犯は銅級相当としてギルドから

手配されていた。

そもそもこの男は、前の町でも手広く仕事をしすぎてギルドに目をつけられ、ハンターが本格的に動く前に逃げ出したのだ。そしてこの町でまたもや詐欺行為を繰り返していた。

だが、ラウリスの噂を聞きつけると、一旦詐欺行為を中断。噂の真偽を確かめるために、しばらく身を潜めていた。その間に、町の悪党が次々と姿を消していく——というか捕まっていくな——の目の当たりにし、いよいよ噂に嘘偽りはないと判断した。

よって、彼が取った行動とはこれまで通り。危険が己に近づく前に町から逃げ出すことであった。町の出口が見え始め、男はその口の端が上がるのだけは止めようがなかった。またもや逃げ果せた、と心の中で呟いた。

——ビュンツ。

ふと突風が吹き、風に煽られ男は思わず目を瞑ってしまった。

閉じた臉を擦り、再び目を開いたとき。誰もいなかったはずのそこに、突然彼女が現れた。

「はい、悪党一名ご案内——ってね」

町の出口。ちょうど男が向かっていた道の中央。

身の丈ほどの長剣を背負った少女が腕を組み、威風堂々と佇んでいたのだ。男は僅かに呆けたが、すぐに理解する。

——あれが劍姫であると。
男の行動は早かった。

頭の中に浮かんだ疑問を即座に思考の片隅に追いやり、踵を返し来た道に戻る。この町の路地は把握済み。逃走ルートは全て頭の中に叩き込んである。この用意周到さこそが、男をこれまで逃げ延びさせていた大きな要因であった。

男の取った行動はおそらく最適解であっただろう。褒められたものではないが、人によつては「見事」と称賛されていたかもしれない。

だが、最適解が必ずしも正解に辿り着くとは限らない。どれほどの最善手を取ったところで、どうしようもない現実というものは存在する。男の目の前に現れたのは、そういった「理不尽の化身」であった。

来た道を振り向いた次の瞬間、男の背に凄まじい衝撃が襲う。

背骨が軋みを受け、もしかしたら折れるのではと思うほどの痛みが生じる。次に意識がハッキリしたとき、男は地に伏していた。

ハツとなり、痛む躰をどうにか動かしその場から逃れようとするが、それよりも先に背中を誰かしらに踏みつけられ、その場に射止められる。
誰が踏んだかはもはや問うまでもないだろう。

——ギンツ!!

それでもなおも逃れようと藻掻く男の耳元に、甲高い音が響く。

ピクリと肩を震わせ、恐る恐ると視線を横に向けると、自分の顔を映し出す鋼の刀身がすぐ側に突き刺さっていた。

「頭蓋に剣を喰らいたくなくすりゃ、大人しくするこつた」

男の背を踏みつけ、その顔のすぐ横に剣を突き刺したラウラリスが告げる。

——ようやく観念したのか。男は抵抗をやめると、どうにか顔を動かし少女に目を向ける。

どうしてここにお前がいる——男の視線はそう物語っていた。

ラウラリスは天使のような悪鬼の笑みを浮かべた。

「そろそろ頭の回る奴が動き出す頃合いだと思ってるね。昨日からこの辺りを張ったのさ」

男は目を見開き、言葉を失った。悪党の絶望が色濃い表情に、ラウラリスはいたく満足気だ。

「わざわざそつちからホイホイ来てくれるんだから、捜す手間が省けるってもんだ」
——行動を完全に読まれていた。

罠が待ち受けているなどとは露知らず、のこのこと剣姫に捕まりにきたようなもの。この瞬間に、詐欺犯として手配されていた男は、完膚なきまでにプライドを叩き潰され、項垂れたのであった。



「ぜひとも我がギルドに登録を！ 今なら銀級待遇でお迎え……」

「はいはい。そういうの良から。じゃあね」

「あつ、ちよまつ」

職員(職員)の言葉を遮り、ラウラリスはさっさと報酬を受け取るとギルドを後にした。詐欺犯(詐欺犯)を捕まえてから更に数日が経過。

その間にも幾人かの手配犯を捕まえたものの、ギルドに引き渡すたびに執拗な勧誘がラウラリスを待ち受けていた。

当初は銅級待遇でということだったのに、今では銀級からスタートという話にまで発展していた。それだけラウラリスがハンターギルドの間でも有名になり始めているのだろう。
更にごくから漏れたのか、エカロを含む『亡国を憂える者』の壊滅にラウラリスが関わっていた件も密かに噂されている。

事件に関わったギルドの誰かしらがちらっと漏らしたのか。人の口が立てられないのは彼女も重々承知しており、仕方がないことだとわかっている。だとしても、こうも熱烈な誘いが繰り返されてはさすがに辟易としてしまう。

「ま、この町の小悪党は粗方捕まえたし、あとはノンビリと観光でもするか」

楽天的に考えながら、ラウラリスは宿へと歩を進める。そろそろ日も暮れる頃合いだ。
——しかし、彼女に平穩は訪れなかった。

宿に到着し、入り口の扉を開く。正面には受付があり、従業員と誰かが話していた。

「ですから、宿泊されているお客様の情報をお教えするわけには……」

「なら、彼女が戻ってくるまで、しばらく待たせてもらっても構いませんか？」

「それにしたって、他のお客様のご迷惑に——」

従業員と話しているのは、どこか見覚えのある甲冑姿の集団だ。先頭の女性とそれに付き従うように後ろに控える三人の男。

——ラウラリスがこの町に来た当初に出くわした猷聖教会——そこに所属する騎士達であった。更に言うならば、先頭にいるのはあのときに騎士達を率いていた女性騎士だ。

「奇妙な偶然もあったもんだねえ」

ラウラリスは他人事のようにほやいた。

困り果てた様子の従業員が視線を彷徨わせていると、宿に戻ってきたラウラリスの姿を視界に捉える。おそらく無意識ではあるうがハッとした表情になった。それを見た甲冑姿——猷聖教会の騎士達が揃って背後を振り向いた。

ラウラリスと視線が交わると、中央の女性騎士はニコリと笑った。

——これは面倒なパターンだ……ラウラリスはそう直感した。

「失礼、宿を間違えました」

思わず真面目な口調になり、回れ右。今し方入ってきた扉から再び外に出ようとすると。

「お待ちしていました、ラウラリスさん」

ラウラリスが扉のドアノブに手をかける直前、女性がその名前を口にしました。

——もはや人違いでは押し通せない。

ラウラリスは嘆くように顔を上げ、次に俯きながら深くため息を吐く。

ポリポリと頭を搔いてから、観念して躰の向きを元に戻した。

「私になんの用だい？ あいにくと私は……」

「ハンターではない——ええ、もちろん存じ上げていますとも。ああ、前にお会いしたときは名乗る時間ありませんでしたね」

女性騎士はラウラリスの前まで来ると、手を差し出した。

「デュラン・セインク。未熟な身ではありますが、猷聖騎士団で部隊長を任されており
ます」

「……ラウラリス。根無し^{フリ}の賞金稼ぎだ」

名乗った女性騎士の手を握り返しながら、ラウラリスはこれから面倒が起こる予感を肌を感じていた。

時間も時間であるし、話をするにしてもまずは食事をしてからということになった。

「ふう……とりあえず腹七分目ってところか。やっぱりこの宿が出す料理は美味い。ついついフォークとナイフが進んじまうよ」

食堂のテーブル席で、上品な仕草で口元をナプキンで拭うラウラリス。食べ始めてから食べ終えるまでの動作は何もかもが完璧であり、マナーのお手本を実演しているかの

ようであった。

「……………」

ラウラリスの食べる様子を見ていた猷聖教会の騎士達は見惚れて——はおらず、むしろ呆然としていた。

何故ならば、ラウラリスがそれまで食事していたテーブルの上には、幾重もの皿が積み上がっていたのだ。

——二人前どころか、優に五人前は超えていそうなほど。もちろん、全てラウラリスが一人でたいらげた料理だ。

最初は人数を呼んで皆で食べると思っていたのだろう。料理を運ぶ従業員達は、ラウラリスが一人で何人前もの料理をあれよあれよと消化していく様を見て戦慄していた。

それはともかく、積み重なった皿を従業員が運び出し、代わりに置かれた食後のお茶を飲む。

ラウラリスがカップをテーブルのソーサーに置いた音で、騎士達はハツとなる。

「それで、私に用ってのはなんだい？」

女性騎士——デュランは呆けていた己を誤魔化すように軽く咳払いをしてから話を始めた。

「実は、あなたの腕を見込んで仕事を頼みたいのです」

「やっぱりその手の話か」

デュランの用件は半ば予想通りであり、だからこそラウラリスは宿の入り口でついたようなため息をもう一度こぼした。

その態度に、彼女の背後に立ったまま控える騎士達がピクリと反応するが、デュランが小さく手を上げて制止する。

「……あまり、乗り気ではないようですね」

「実際に乗り気じゃないからね」

ラウラリスがあえてハンターではなく、フリーの賞金稼ぎになったのは、こういった指名依頼を避けるため。組織や権力者に縛られるのを嫌ったからだ。

いや、ハンターであろうとなかろうと、今回ばかりは話が違った。

実のところ、ラウラリスは『宗教』というものとあまり関わり合いになりたくないのだ。

「悪いがお断りさせてもらおうよ」

「……まだ依頼の内容をお話ししていないのですか？」

「だからだよ。下手に話を聞くと、余計なゴタゴタに巻き込まれそうだからね」

フリーの賞金稼ぎへの直接の依頼という時点で、厄介事の匂いがブンブンする。つまりは、ギルドのような正式な組織には通しにくい仕事内容である証左だ。

「そこをどうかお願いできませんか？ 報酬は弾みますよ？」

「あいにくと金には困っちゃあいいないよ。とりあえず、ここの美味しい料理をあと十人前ほど食っても余裕があるくらいにはね」

冗談なのか本気なのか、判別しにくい返しである。

一応、全部が真実であるのだが、そこにツッコミを入れる猛者はこの場にはいなかった。

「デュラン様。やはりこのようなどこの馬の骨とも知れぬ者に、あの件を頼むのはどうかと」

部下らしき騎士の一人がデュランに進言する。馬の骨と呼ばわりに関しては、ラウリスは気にならない。対外的に見れば、自分はギルドに所属していない身元不明者なのだ。

「それについては既に話し合ったはずです。現状では彼女以上の適任者はいません」

「ですが……」

なおも言葉を続けようとする部下の騎士だったが、デュランの目配せにしぶしぶ口を

閉じた。

デュランは改めてラウリスに目を向ける。

「どうやらラウリスさんは宗教というものに良い感情を抱いていらっしやらないようですね」

「ちよいと宗教ってのには嫌な思い出があるってだけさ。あんた達が信奉する某に対しては何も思っちゃいないよ」

ラウリスは、『宗教』というものを真正面から否定するつもりはなかった。

別にどこかの誰かが何かしらを信じるのは良い。

個人の自由であるし、宗教を通じて神やそれに類する何かを信じることは心の拠り所となり、生きる上での活力となり得ると理解していた。

同時に、時と場合によっては宗教というものがどれほど面倒な存在になり得るかも過去の経験から重々承知していた。

デュランの言葉に対応が芳しくなかったのはこれが原因だった。

「……ラウリスさんは神の存在を信じていないと？」

「ちよっとお嬢さん、馬鹿を言っちゃあいいけないよ」

デュランの残念そうな様子に、とんでもないとばかりにラウリスは言った。

「この世で私ほど神様を信じてる人間はいないだろうよ。これでも日々感謝してるくらいだ」

ちよつと愉快犯じみたちよつと困った神様ではあったが、それでもラウラリスは己に新たな人生を与えてくれた神には感謝していた。

実際に神の手で新たな人生を得た女性（ラウラリス）の言葉は説得力が違う。

デュラン達は知る由（よ）もなかったが、ラウラリスの物言いにはそれだけの力がこもっていた。

「とはいえ、私の信じる神様とあんたらの信じる神様は違うだろうけどね」

「既に別の宗教を信仰されていると?」

「個人的な恩みみたいなもんさ。それを宗教として信仰しているのは私一人だけかもね」

「そうですか……」

気落ちした風のデュランに対して、ラウラリスは安堵（あんず）に近い気持ちを抱いた。

（どうやら、面倒なタイプの宗教家ではなさそうだ）

部下の騎士達はともかく、デュランはラウラリスが嫌う類いの人間ではなかったようだ。

「話がズレたね。そんなわけで、あんたからの依頼を請け負うつもりはない」

「……残念ですがこの話はここまでとしましょう。お時間を取らせて申し訳ありませんでした」

「こっちこそ、無駄足をさせて悪かったね」

互いに言葉を述べてから、デュランが席を立ち上がった。これで話は終わり。次の瞬間から彼らは赤の他人になる。

——しかし、それを許さぬ事態が彼女達を襲う。

ザワリと、ラウラリスの頬を嫌な気配が撫でた。それは経験則からくる彼女の勘（かん）だった。

「ちっ、これだから嫌だったんだよ!」

ラウラリスは苛立（いらだ）たしそうに吐き捨てながら、椅子（いす）を倒す勢いで立ち上がり、側に立（た）てかけておいた長剣を取る。いきなり剣を取った少女の様子に、乱心（らんしん）したのかと警戒心を抱く（けんせい）敵聖騎士（けんせい）の面々。

だが、ラウラリスの視線は彼らにではなく、食堂の窓に向けられていた。

いったい何事なのかと、彼らも釣られて窓の外に目を向ける。

次の瞬間、食堂の窓を突き破り武器を持った複数の人影が飛び込んできた。

突然の出来事に、食堂にいた他の客達は思わず硬直する。